パリのカメラショー「SALON de la PHOTO」視察

フランス・パリで 10 月 9 日から 12 日まで開催された「SALON de la PHOTO」(サロン・ドゥ・ラ・フォト)を視察しました。

欧州の写真関連の見本市としては 2018 年までドイツで開催されていた「フォトキナ」に次ぐ規模の展示会で、現在ではおそらく欧州最大規模のカメラショーとして毎年賑いをみせています。2019 年まではパリ南西部のポルト・ド・ベルサイユで開催されていましたが、2020 年から 2 年間コロナ禍による中断を挟み、2022 年からはパリ北東部のグラン・アール・ドゥ・ヴィレットでの開催となっています。ここは 1867 年から食肉工場として稼働していた場所で、1974 年に閉鎖されたのちにパリ最大の公園として整備され、敷地に遺された歴史的な建造物のなかで各種催しが開催されています。

SALON de la PHOTO は日本カメラ博物館とも縁があり、日本の CP+2011 に出展していた当館ブースをフランスの写真工業会(SIPEC)関係者が見学したことをきっかけに、

デジタルカメラの歴史展示をぜひパリでも行いたいとの依頼を頂き、同年 10 月の SALON de la PHOTO では会場内に設置された日本カメラ博物館ブースで「ソニー マビカ試作機」を含む 120 点のデジタルカメラを展示しました。私は展示担当者として現地で展示作業や来場者対応などを行っていましたが、当館展示が現地のニュースや雑誌にもとり上げられるなど注目度も高く、見学者がブース内に入りきれないほどの盛況を博したことが思い起こされます。

現在の会場は中央が大きな吹抜けになっており、1 階中央部にキヤノン、ニコン、富士フイルム、ソニー、OM デジタル、タムロン、シグマ、リコーイメージングが大ブースを構え、内周沿いに写真関連企業が中小規模のブースを出展していました。現代的なデジタル製品のほか、銀塩関連の展示も意外に多く、なかには湿板写真の撮影・現像の実演を行っているブースもありました。また会場端には販売店が広いブースでカメラ販売を行っており、高価な機材をその場で購入している来場者や、購入相談をしている方も

会場外観

会場内

湿板撮影

ニセフォール・ニエプス・ミュージアム所蔵作品展

多く見られるなど、CP+との違いも感じられました。

2 階フロアは内壁に沿って会場を囲むかたちとなっており、ビジネス関連ブースをはじめ、ニセフォール・ニエプス美術館（musée Nicéphore Niépce）の所蔵作品展も開催され、ブレッソン、ドアノー、サルガド、ケルテス、キャパ…など著名な写真家たちの作品に見入る来場者も多くみられました。また、CP+と連携しているフォトコンテスト「Zooms」の受賞作品展も行われ、日本人受賞者 2 名の作品も紹介されていました。このほか 2 階端には書籍販売コーナーも設けられ、機材だけではなく写真文化そのものへの畏敬と関心の強さがうかがわれる構成となっていました。

書籍販売コーナー

コロナ禍を経てひさしぶりの海外視察となりましたが、気になった展示の担当者と会場で直接繋がることもでき、実りある機会となりました。このところ地域との連携を積極的に行っているように、これがきっかけで海外との連携企画が生まれないとも限りません。

再開の第一歩として、会場の熱気を少しでも感じていただけましたら幸いです。

（学芸員　山本一夫）